

Let's challenge ! You can do it !

～「自律した学び手」の育成を目指して～

1 はじめに

昨年度は、「自律した学び手」を育てるべく、個別最適な学びと協働的な学びの充実に向けて、体育に重点を置き、自由進度学習を進めた。我々教師は悩みながらも、自由進度学習のよさや効果を実感し、教科や単元などと照らし合わせながら、指導を進めた。その結果、子どもたちの「学びに向かう力」は着実に育っていると感じる場面がいくつも見られた。

では、学校全体を「自律した学び手」という観点で見るとどうであろうか。学習場面に限らず、学校行事や学校の仕組みなど「自律した学び手」を育てるための改善点がまだ多く点在している。



これらの改善点が、ルービックキューブの「面」とすると、令和4年度は、「学習場面」という一面をそろえてきた。しかし、すべての「面」をそろえるには、「自律した学び手の育成」という大きな目標を目指して、他の領域の学習や、学校行事、生活指導なども含めた学校教育の様々な場面で一貫した取り組みが必要である。




そこで、本年度は、生活科・総合的な学習の時間を核として、これまで育んできた「学びに向かう力」を、学校の様々な場面で伸ばすことができるようにする。生活科・総合的な学習の時間を核とする理由は、「各教科の学びを生かしやすい教科であること」や「学校行事との連携が図りやすいこと」「カリキュラムを自由に決められること」などがある。

2 基本的な考え

(1) 育みたい力について

これまで「自律した学び手」として育んできた「学びに向かう力」を、改めて以下のように設定する。

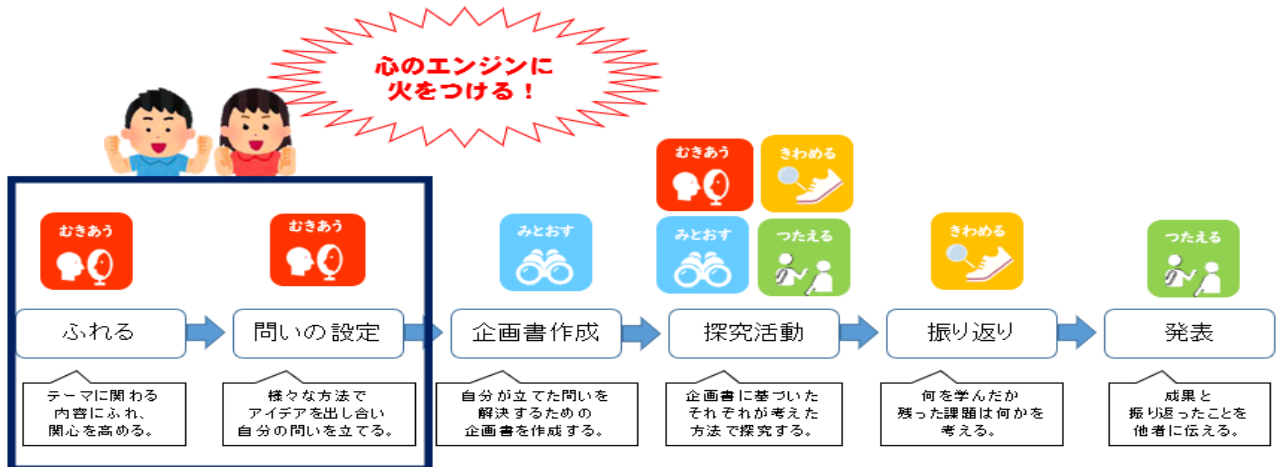
学びに向かう力	力の具体
むきあうちから 	<input type="radio"/> 夢中になってやってみる。 <input type="radio"/> 知りたいことや、やってみたいことを見付ける。
みとおすちから 	<input type="radio"/> ゴールを決める。 <input type="radio"/> ゴールに向けて必要なことをたくさん出して、計画を立てる。 <input type="radio"/> 必要に応じて計画を修正する。

ふみこむちから 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本やタブレットを使ったり、調査をしたりして必要な情報を集める。 ○ 調べたことを整理したり、分析したりして、自分の考えをもつ。 ○ 新たな問いに気付き、さらに調べみたいことややりたいことを見付ける。 ○ うまくいかなくても、何度もチャレンジする。
たしかめる力 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の性格や付けたい力、自分の成長や学んだことについて考える。 ○ 何かをしたあと、なぜうまくいったのか、またはなぜうまくいかなかったのか考える。
つたえるちから 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語の学習を生かして、分かったことを文に書いたり、話したりする。 ○ 伝えたいことを、動画や写真を使いながら表現する。 ○ 聞き手に伝わりやすい伝え方を考える。

「自律した学び手」を育てるとはいえ、子どもにはそもそも「学びに向かう力」の素地が備わっている。教師は、伴走者として学びたい欲求を後押し（コーチ）したり、困った時に支援（ファシリテーター）をしたりしながら、子どもの主体的な学びを助け、子どもが力を存分に引き出すことができるような環境を整える役割に徹することが大切である。

(2) 本年度研究の重点について

「学びに向かう力」の育成に最適な手法として、PBL(Project Based Learning)の流れがある。PBLは、教師の指示のもとやられる学習ではなく、子どもが強い興味・関心に導かれ、自分のペースで学習を展開することにより、効果的に「学びに向かう力」を育む学習の手法である。そのためにはまず、子どもの「学びたい」という「心のエンジン」に火をつける必要がある。



<本年度研究の重点その①>

そして、子どもの「学びたい」という「心のエンジン」の火を絶やさないようにすることが大切である。本校では、2年前から学校努力点で、学習の振り返りについて研究してきた。「がんばっタイム」という時間を設け、学習のめあてについて振り返ることにより、見通しをもって学習に取り組むことができるようになったり、できるようにな

ったことを自覚して自信につなげたりする児童の姿が見られた。この研究の蓄積を生かし、生活科・総合的な学習の時間に「がんばっタイム」を設定し、振り返りながら「自分の問い」の解決を目指すことができるようにする。



<本年度研究の重点その②>

3 研究の手立て

以下の二つを手立てとして取り入れる。

(1) 心のエンジンに火をつける“問い”をもつ

「自分の問い」をもつためには、テーマとの出会いや関わり方が大切である。PBLでは、「ふれる」段階から「問いの設定」の段階までの活動である。

まず、「ふれる」段階では、テーマと存分にに関わり、思ったり感じたりしたことをたくさん集めるようにする。そのため、教師は、テーマとどのように出会わせるか、また、どのような関わり方をするとよいのかを考える。

次に、「問いの設定」の段階では、「ふれる」段階から一步踏み込んで考えたり、関わったりすることを通して、「自分の問い」を設定できるようにする。そのために、教師は、子どものテーマに対する興味・関心がぐっと高まる工夫を考える。例えば、2年生の生活科「おもちゃづくり」の単元では、「ふれる」段階でゴム鉄砲を作って遊ばせ、「問いの設定」の段階で、小型な鉄砲や大型な鉄砲など様々な鉄砲を提示して「オリジナルのゴム鉄砲をつくりたい」という気持ちを引き出して「自分の問い」を設定させる。また、3年生の地域をテーマにした学習では、「ふれる」段階で、名古屋の魅力的な場所について調べ、「問いの設定」段階で名古屋市の魅力度が、他都市に比べて低いことを知らせ、「魅力を伝えたい」という気持ちを引き出して「自分の問い」を設定させる。このように、子どもにテーマに対する意外性や課題意識を抱かせ、心のエンジンに火をつける方法を考える。

(2) 学びを振り返り、次の学びへ生かす「がんばっタイム」

企画書に基づいて問いの解決を目指すために、活動ごとにめあてを設定する。そして、活動後に「がんばっタイム」を設定し、できたことや分かったこと、できなかったことを振り返らせるとともに、次に何をしなければならないのかを確かめさせる。

ただし、「がんばっタイム」は、一週間に1度を目安に子どもに自主的に取り組ませ

る。毎時間きちんとめあてを決めて振り返りたい子もいれば、1時間では活動のキリが付かず、振り返っても仕方がないと判断する子もいるため、「がんばっタイム」設定のタイミングは、子どもの自主性に委ねる。

(振り返りの例)

- ・低学年：() もっとやりたい。
 () いまやっていることはできたから、べつのことしたい。
 () なにをやってよいかわからない。 } 適当なものを選ばせる。
- ・中学年：めあてについて、「できた」「まあまあできた」「あまりできなかった」「できなかった」の4段階に○を付け、その訳を可能な限り記述させる。
- ・高学年：中学年の振り返りに加え、全体の中での進捗状況や新たな課題についても触れて記述させる。

教師は、この振り返りを見ながら、子どもへの声掛けや支援の方法を考える。

4 研究の方法

本年度は、低学年・中学年・高学年の三つの部会に分けて研究に取り組む。各部会は定期的に部会を開き、各学年における年間計画の立案・修正、子どもの様子の共有、手立ての見直しなどを行う。

また、部会メンバーに授業を公開し、授業後には簡単な反省会を行い、今後の展望について話し合う。(可能なら「問いの設定」または「探究活動」が望ましいが、限定はしない。)

5 検証の方法

「問いの設定」の段階においては、部会で考えたテーマとの関わらせ方と問いのもたせ方の有効性について、子どもの様子からつかむ。また、「探究活動」の段階において、「がんばっタイム」の有効性について、子どもの様子からつかむ。

また、6月と12月の年2回、教員と子どもに実態調査アンケートをとり、「学びに向かう力」の変容をみていくことにする。

6 年間計画

